

# 桑野塾

桑野塾

検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。  
どなたでもご参加いただけます。  
それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

## 第51回

2018年  
9月29日(土)  
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス 33号館 434号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。

**参加無料**

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく

事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。

ご了承ください。



## プロコフィエフ来日100周年——1918年夏の日本滞在64日間を検証する

報告者：沼辺 信一



東京・赤坂溜池の料亭「花月」でのプロコフィエフ  
1918年7月2日

1918年6月1日、27歳の作曲家セルゲイ・プロコフィエフは東京駅に降りたちました。ロシア革命の騒乱を嫌い、新天地アメリカでの成功を夢見た彼は、シベリア鉄道と客船を乗り継いで、通過地点として日本に立ち寄ったのです。

いくつかの偶然が重なり、プロコフィエフは日本に二か月間も滞在し、京都、奈良、軽井沢、箱根などを旅したほか、東京と横浜で国外初のピアノ・リサイタルまで開催しています。驚いたことに、若き作曲家の評判は極東の島国まで届いていました。評論家の大田黒元雄はプロコフィエフと親しく交際して、その言動を詳しく書きとどめ、愛好家の徳川頼貞は彼にピアノ・ソナタを注文しようとしています。

来日100周年を記念して、プロコフィエフの日記や、大田黒と徳川が書き残した記録を読み解き、日本での彼の足取りを辿りながら、「プロコフィエフの生涯で最も謎めいていた二か月間」を検証します。来日時にプロコフィエフも弾いた大田黒元雄旧蔵のピアノによる演奏 (CD) もお聞かせします。

●沼辺 信一(ぬまべ しんいち) 編集者・研究者。

1952年生。ロシア絵本の伝播、日本人とバレエ・リュス、プロコフィエフの日本滞在など、

越境する20世紀芸術史を探索。桑野塾登場は五回目。

ブログ <http://numabe.exblog.jp/>



別れの挨拶に訪れたプロコフィエフ、大田黒元雄夫妻と  
1918年8月1日



プロコフィエフも弾いたピアノによるCD

《大田黒元雄のピアノ》

演奏＝青柳いづみこ、高橋悠治 (ALM Records, 2016年録音)